

広報
市民リポーター
だより
第7回

米が輝くときは

経済的には「大国」の仲間入りしたといわれる我が国も、こと農業に関しては食糧の自給率を見て「小国」に入るのはないでしようか。後継者難など多くの問題が山積しているところに外国農産物の輸入問題や生産者米価の引き下げなどあいまって、農業の前途には暗雲が立ちこめていると言わざるを得ない状況です。けれどもそんななかで、葉づけ農業、不安を抱いた消費者グループと無農薬栽培農家との契約栽培、共同購入など、これからは生きぬく力強いプロの農業者（集団）の出現は心強いことです。

このように農業情勢の厳しい折、大館市農協を訪ね武田指導課長にお話を伺いました。

四年続きの豊作も

今年の水稲の作況指数は一〇三の「やや良」（県北は九七で「やや不良」）で、県全体で見ると四年連続の豊作となりました。しかしこれにより食糧法を堅持するために生産調整が一層強化されるのは、という懸念も出ています。

今年度の転作目標面積は総計で約九〇〇ヘクタール。水田農業確立対策事業の実施により転作面積

は大幅に増加され、農家にとって面積の消化はもろろんのこと、その面積分の米の減収を転作作物でいかに補うかが大きな課題となっています。また米についてもより低コストで、より品質の優れたものを生産することが重要だということでした。

「あきたこまち」は娘ざかり

今年の水稲作付面積は、およそ三二〇〇ヘクタール。キヨニシキとアキヒカリが各四四％ほどを占め、あきたこまちは九％ぐらい。県産米のエースとしてデビューし今や売れっ娘といわれている「あきたこまち」についてお聞きしました。

あきたこまちはコシヒカリを母に、奥羽二九二号を父として昭和五十年に交配され、五十九年県の奨励品種となり翌六十年から本格的に作付けが始められました。あきたこまちは、耐冷性がやや強い傾向にあり、何より食味において優れ、冷めても味が落ちないとのこと。しかし、きわめて多収は期待薄で、くきの質が不十分なため管理の仕方によっては倒伏のおそれもあるといえます。新しい品種なため栽培技術を確認・向上させる

ことが急務であり、生産者の栽培努力に期待するところが大きいという事です。

あきたこまちは、日本穀物検定協会の銘柄米区分で昨年までの三類格付から二類へと格上げされました。これはコシヒカリに優るとも劣らないという食味評価と、作付面積の増加に伴い出荷・流通量の確保が成された点が認められたもので、良質米としてのお墨付きが出たと考えて良いでしょう。味は一類、価格は二類、安くておいしい

米という市場評価をより向上させ、品質管理を十分に行うなどして「同じあきたこまちなら大館産のものを」と消費者に産地指定されるほどの人気を得ることが農家の生産意欲を高め、産地間競争に勝ち抜く力になると思います。

農家の声をきいて

農協まつり最終日に開かれた農事発表会を聞きに行ったところ、「会社勤めがあるので米作りにはあまり時間をかけられない」という兼業農家の方や、「耕作地が散らばっていて全部に手が回らない」「米だけに頼らず、転作と合わせたかたちで複合経営化し増収を図ればどうか」など、今後の農業経営の課題や対

広報市民リポーター
佐藤 康 恵 (川口)



▲大館市農協の武田課長から取材する佐藤リポーター

応策について意見や体験を交じえて発表されていました。低コスト稲作りによる経営の安定化がいわれて久しいのですが、経営規模を拡大すると転作割り当ても増えること、農作業を共同化するにも兼業農家が多く作業分担当が困難なこと、そして生産費の三割を占める農業機械の償却費をいかに削減していくかなど、今なお大きな問題となっているようです。

担い手たちは今

農業短大生のこれからの農業に対するビジョンは、三〇ヘクタールぐらいの大規模経営を実現し、一般企業のように就労時間を決めて月給制にし、作業は機械化、管理はコンピューター化し人はそれらを操作するだけとなりました。また、千葉県ではレーザーコントロールによるブルドーザーで土地改良をし、用排水路は地下パイプ化一枚七・五ヘクタールの大型水田で水管理は自動化され、土地利用効率一七三％と機械も土地も非常に効率良く利用し、農業革命ともいえる低コスト化経営が始められているといえます。

種苗交換会、農協まつりと秋の行事も終わり、収穫を終えた田んぼが雪に包まれるのも真近かです。これからの農業が厳しい冬の時代ばかりではいけません。米が輝き市街を囲む四千農家が潤ってこそ街の発展・活性化の道が開かれるのではないかと思うのです。

◇広報市民リポーターだよりは、毎月1日号で、6人のリポーターが独自に取材した記事を掲載しています。